

## 「東欧革命」への「長い」軌跡 — 「正常化」時代における非言語的象徴の機能 —

京都大学地域研究統合情報センター助教  
福田 宏 (hfukuda@cias.kyoto-u.ac.jp)

### 目次

はじめに .....	1
1. 課題設定：後期社会主義における市民社会・ロック・メディア .....	2
2. 前提としての 1960 年代、転換点としての 1968 年 .....	5
3. 体制と「反体制派」との間：グレーゾーンとしてのロック .....	8
4. テレビ・ドラマと体制の安定化：《ゼマン少佐の 30 事件》を例として .....	11
おわりに .....	14
参考文献 .....	16

### はじめに

本報告は、いわゆる「東欧革命」に至る過程を非言語的象徴の側面から分析することを目的とする。一般に、この体制転換は非常に劇的なものであり、成功裏に終わった「革命」と見なされているが、しかしながら他方では、旧東欧諸国の体制はなぜ 1989 年まで持ちこたえたかという疑問も成り立ちうる。言うまでもなく、ブレジネフ・ドクトリン（すなわち制限主権論）の存在は決して無視できないが、1953 年のスターリン批判に始まり、56 年のハンガリー動乱・ポーランドの暴動、68 年の「プラハの春」といった一連の現象を経た後、これら諸国はいかにして体制を維持し得たのか、こうした点についても考察してみる必要がある。また、旧東欧の体制転換を「長い時間がかかった革命」とみることで、（同じく長い時間がかかると思われる）アラブ諸国の変容との比較も有意義なものになると考えられる。

本報告において最初に指摘しておくべき点は、コミュニケーション技術の進展である。「アラブの春」において、twitter や facebook、you tube といった新しいコミュニケーション・ツールが駆使され、それまで考えられなかったような民衆の動きが生じるようになったが、1960 年代についても、家庭用テレビの普及や衛星中継放送の実現、70 年代に入ってからカセット等の録音機材の普及といった大きな変化が生じている。この時期、西側・東側問わず、大学生が急激に増加し、既存の体制に反発を示すようになったが（特に 1968 年）、その背景にはこうした技術革新があった。当時の学生が、テレビを通じて世界中の学

生とつながっていると感じたのは、その象徴的な例と言える（カーランスキー2008: 後編36）。

だが、新しいコミュニケーション技術は民主化にのみ活用されるわけではない。「プラハの春」が失敗した後、チェコスロヴァキア政府は社会を「正常化」するにあたってメディアを大いに利用した。本報告において具体的にフォーカスを当てるのはロック音楽やテレビ・ドラマといった素材である。公の場では、社会主義的スローガンやシンボルが盛んに提示され続けていたが、70年代以降、その動員力は実質的に消滅し、イデオロギーは空疎化した。政府にとって重要であったのは、むしろ、民衆を「楽しませる」コンテンツの提供であった。例えば、この時期に内務省主導で製作された刑事ドラマ《ゼマン少佐》は人気を博し、東独でも放映されている。

1989年の体制転換から四半世紀が経過し、旧ソ連・東欧諸国においても社会主義期が研究対象として本格的に注目されるようになってきている（Falk 2011; Leffler & Westad 2010）。言うまでもなく、当時の体制は抑圧一色だったわけではない。そこには人々の暮らしがあり、一定のダイナミズムが存在した。本報告においては、こうした近年の研究蓄積を参考にしつつ、ロック音楽やテレビ・ドラマ等の非言語的素材がコミュニケーション技術の進展を背景として如何なる機能を果たしたのかについて明らかにしていきたい。

## 1. 課題設定：後期社会主義における市民社会・ロック・メディア

ドゥプチェク失脚後にチェコスロヴァキア共産党書記長となったフサークは、1970年1月、党機関紙『赤い権利（Rudé právo）』にて安定した社会の重要性を説いている。

人民にとっての静かなる生活、法律の遵守、社会の自由なる発展、経済活動の発展にとっての好ましい条件、安定性、社会と生存に関わる確実性、そして、週単位の不安定な生活をしなくても済むような、[消費財の]供給不安や通貨のパニックを経験しなくても良いような展望を人民が持てること、そういったものが政治の安定によってもたらされるのです<sup>1</sup>。

これは「正常化」の内実を端的に示す文章であった。ワルシャワ条約機構軍による占領を受けた後、チェコスロヴァキアでは一連の「改革」が撤回されたが、50年代前半までの強圧的な体制がそのまま再現されたわけではない。政府は国民の不満を抑えるために消費財の供給を優先し、彼らの私的領域への沈静を実質的に奨励するようになった。政治的プロパガンダは依然として重要であったが、それは、政府と国民の一種の「社会契約」を再確認する儀式と化した。

本報告においては、消費主義とイデオロギーの空疎化によって特徴づけられる概ね1970～80年代の時期を後期社会主義と呼ぶが、言うまでもなく、こうした状況は他の社会主義

---

<sup>1</sup> “Rozhovor Rudého práva se soudruhem Gustávem Husákem: Proč byl leden nutný,” *Rudé právo*, January 5, 1970, p. 3 (cited in Bolton 2012: 73).